

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
プロジェクト研究(重点領域プロジェクト研究)

2007年度研究【経過・成果】報告書

研究科名 (1)	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科			
共同研究科名等 (2)				
研究課題	コミュニティにおける3次元介護予防システムの構築と新たな介護予防プログラムの開発			
研究代表者	所属・職名	氏名		
	立教大学・コミュニティ福祉学研究科・教授(研究科委員長)	福山 清蔵 印		
研究組織	所属大学名等・職名	氏名		
	立教大学・コミュニティ福祉学研究科・教授 " " " " 立教大学・コミュニティ福祉学研究科・准教授 立教大学・現代心理学研究科・教授 立教大学・社会学部・准教授 " 福岡大学・スポーツ健康科学研究科・教授	森本佳樹 松尾哲矢 濁川孝志 坂田周一 河東田博 原田晃樹 箕口雅博 安松幹展 佐野信子 田中宏暁		
研究期間	2007年度 ~		2008年度	
研究経費	2007年度	2008年度	年度	総計
	4,718,788円	円	千円	4,718,788円

(1)(2)は『交付申請書A』を提出した研究課題のみ記入して下さい。

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクトは、「介護予防」を地域全体で創造・維持発展させるための新たなコミュニティシステムの確立を目指す方法論を研究する。具体的には、まず「介護予防」の「予防」の概念を、コミュニティ心理学で提唱されている予防の考え方を活用し、1次予防・2次予防・3次予防と階層化して捉え直すことから始める。その上で、階層毎に、地域で現在行われている個別・単発的な介護予防に関する取組みをコミュニティ福祉学の各専門領域の視点から見直しを行う。同時に、新たな運動プログラムの開発・新たな健康指標の開発を行い、さらには、コミュニティ福祉分野の実践人材の育成手法の開発も同時に開発を行う。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ コミュニティ } { 介護予防プログラム } { 人材育成 }

**研究【経過・成果】の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、目標に基づき、以下の3つの視点から研究を進めている。

1. コミュニティにおける3次元介護予防システム構築のための理論的研究
2. 介護予防プログラム、モニタリング手法の開発
3. 1・2を通じて地域活性(再生)に貢献するコミュニティ福祉分野の実践人材の育成手法開発

## 1. コミュニティにおける3次元介護予防システム構築のための理論的研究

(1) 家族介護のための家族アセスメント  
 コミュニティにおけるサポート体制を考える上でも「家族の介護力」にその大部分を  
 依拠していることは確かであり、それゆえ「家族支援」としての介護サポートを  
 コミュニティは根拠を明確にするとともに、家族支援としての介護支援の実質化を図  
 ていくべきである。そのために家族支援のためのアセスメントが求められている。  
 3名の高齢者ケアの担当者に対してヒアリングを行った。現場職員から見た「家族  
 介護の条件もしくは力」、コミュニティケア(自治体)の立場から見た「家族の介護力」  
 施設職員から見た「家族介護の限界と家族の力」に関して延べ10時間のヒア  
 調査を実施した。

介護職とのインタビューを並行して実施した結果以下のような観点からのコンセプト  
 を現段階で想定することができた。

要介護者との関係、介護時間の捻出と地理的距離、単独介護と複数介護 介護に  
 かかわる居住的空間的関係、生計関係、家族のストレス感受性、介護思想・意  
 識・責任感、介護技術の保持、介護にまつわる家族内葛藤、外部委託の許容度、  
 家族内親和度、家族内家事分担、介護者の健康度、関心と熱意と工夫の度合、  
 家族内レクリエーション、家族史的トラブルの存在 介護種の自己理解度

## (2) コミュニティ形成・構築に関する調査

介護予防のシステム構築の事例として、滋賀県余呉町の協力を受け、2006年の介護  
 保険事業の見直し時に着手した介護福祉基盤整備事業の展開過程について調査した。この  
 事例では、空き家など地域資源を有効活用した基盤整備事業を通じて、空き家探し、立地  
 合意形成、工事確認などができた。  
 海外の事例として、イギリス・グロスターシャー県におけるパートナーシップ政策に  
 関する調査を行い、自治体からNPO等への資金提供の枠組みやNPO同士のネットワー  
 ク形成の実態を把握することができた。ここから得られた知見は、コミュニティ形成の  
 基盤条件を考察する上で有益であり、来年度以降、国内調査の分析に生かしていきたい。

## 2. 介護予防プログラム、モニタリング手法の開発

## (1) モニタリング手法開発

生活習慣病との関連性が高いとされるメタボリックシンドロームの判定や、これに陥  
 る可能性の推定は、個人の健康管理上とても重要な知見であり、高齢者にとっても日常  
 の健康状態を把握する上で必要不可欠のデータである。しかし、これらの判定には医  
 療機関における血液検査などが必要とされ、煩雑な手間暇を要してきた。  
 そこで今回の一連の研究では、メタボリックシンドロームの危険性をより簡便に推定す  
 るための新たな指標の開発を試みた。昨年の予備的研究の結果、利便性が高く、ある程  
 度の推定制度を備えた指標が得られたため、本研究では被験者数を増やし、その有効性  
 を検討した。  
 その結果、本研究で考案された新たな指標は、生活習慣病やメタボリックシンドロー  
 ムのスクリーニングの指標として、これまで頻繁に使用されてきたBMIや%Fatなどよ  
 りも、全般に血液の健康度を示唆するデータとの関連性が強く、また、身長、体重、ウ  
 エストの3項目のみで簡単に算出可能であり、BMIに匹敵する測定の簡便性も備えてい  
 ることから、その有用性が確認された。

## (2) 介護予防プログラム開発



飯能市デイケアセンター「サンタの森」と連携をはかりなが  
 ら高齢者に対する介護予防プログラムの検討、開発に着手した。  
 具体的に実施した内容は以下の通りである。

「サンタの森」で実施されている高齢者運動プログラムの  
 検討

準備運動(約20分間)における運動のバリエーションと発声  
 を意識した運動プログラムの開発、実施、評価

主運動時のテレビゲーム機を用いた運動とバーチャル体験  
 の創出、評価

## 研究【経過・成果】の概要 つづき



準備運動におけるバリエーションと発声を意識した運動プログラムの開発



指標測定



太鼓ゲーム・ボウリングゲームを使用した運動とバーチャル体験の創出

## 3. 1、2を通じて地域活性(再生)に貢献するコミュニティ福祉分野の実践人材の育成手法開発

地域活性(再生)に貢献するコミュニティ福祉分野の実践人材を育成するためには、日常的なコミュニティ福祉活動の中での触れ合いや体験を通じた研究活動が必要である。さらに、既存の福祉機関の取り組みと連携し、相互協力を基にした共同研究を展開することにより、既存の取り組みは強化され、深みを増し、新たな価値をも創出する礎となる。そこで、日常的な触れ合いや体験の積み重ねを体系的・継続的に創り出し、相互に英知を出し合う共同研究の場を創り出すための「福祉クリエイト工房」を用意する。

## (1) 福祉クリエイト工房 in 高畠

2008年2月に高畠町にて、次年度に繋げる予備的取り組みを実施した。

## (2) 福祉クリエイト工房 in 新座

立教大学新座キャンパスが所在する新座市には、地域福祉を創り出す実践母体としての社会福祉協議会がある。新座市社会福祉協議会では6つの福祉エリア毎に地域福祉推進協議会を立ち上げようとしている。現在まだ2つの地域福祉推進協議会しか組織されていないが、「福祉クリエイト工房」の研究スタッフと共同研究を行うことにより、新たなコミュニティ福祉実践と実践人材の育成を目指す。この共同研究が成功することにより、「福祉クリエイト工房」の取り組みが新座市全域に広がり、さらには他の自治体へと広がっていく可能性がある。そうした地域では、子どもから高齢者まで、さらには、しょうがいの有無に関わらず誰もが集い会える地域社会が創造できるかもしれない。

共同研究は新座市社会福祉協議会北部第二地区地域福祉推進協議会(北二協)を実験基地とし、北二協と連携する共同研究活動を「福祉クリエイト工房 in 新座」と呼び、以下のような年間を通じた定期的な各種地域福祉推進活動および地域福祉推進セミナーを行う。

なお、2008年度末には報告書としてまとめ、同報告書には2009年度以降新座市内全域の地域福祉活動として展開していけるようにするための提言も記す予定である。

研究活動担当責任者

立教SFR「工房」- 担当責任者：福山

新座市社会福祉協議会北部第二地区地域福祉推進協議会(北二協)

- 担当責任者：木村

事務局体制

上記研究活動計画推進のため、SFR & 北二協の担当者からなる事務局を設置する。

この(様式2)に記入の、経過・成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表**(研究によって得られた研究経過・成果を発表した ~ について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

雑誌論文

原田晃樹「パートナーシップ政策をめぐる政府間・官民関係」(単著)『日本地域政策研究』日本地域政策学会、第6号、2008年4月(刊行予定)。

原田晃樹「自治体のNPOに対する事業委託の現状と課題 - 事業委託の制度設計に関する一試論 - 」(単著)『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第10号、2008年3月、41-60頁。

図書

原田晃樹・藤井敦史「多様な活動を支える基盤づくり」、村上和夫・長田佳久・河東田博編『たのしみを解剖する アミューズメントの基礎理論』所収、現代書館、2008年、16頁。

シンポジウム等

なし

その他

[学会発表]

原田晃樹「パートナーシップ政策の現状と課題」(日本地域政策学会・信州大学・2007年7月28日)

原田晃樹「パートナーシップをめぐる政府間関係」(日本都市学会・松山総合福祉センター・2007年10月27日)

[報告書]

原田晃樹・藤井敦史『NPO等の公益的な活動組織への事業委託に関するモデル設計の研究報告書』(豊島区委託調査)、2008年3月(刊行予定)。

**研究【経過・成果】の詳細**

## &lt;申請当初の計画・目的の達成度&gt;

コミュニティ構築理論研究：本年度は当初計画通りに介護職へのインタビューを中心としてコンセプトの整理と概念の明確化を行った。結果として17項目が想定された。来年度にはこの結果を踏まえて詳細な検討と文献的検討を並行して精査し、併せてアンケート調査を実施することにより、アセスメントツールの開発に進む予定である。

プログラム開発：運動プログラムの構成、バリエーション、評価項目等の点から、サンタの森の担当者と本研究グループ、さらには学生スタッフとの検討会を開催するとともに利用者のヒアリングを実施した。その結果、利用者の実施満足度は高いものの、運動プログラムについては、準備運動とマシンを用いた運動を中心に展開されていることもあり、準備運動や主運動群のバリエーション不足の問題が示唆された。また、運動効果の測定評価について運動中の循環系の評価（心拍数等）をどのように取り入れるか等の課題が明らかとなった。

準備運動（約20分間）における運動のバリエーションと発生を意識した運動プログラムの開発、実施、評価については、運動のバリエーション、取り組みやすさ、発生の共鳴を意図した「あいうえお体操」を試作し、例えば、「あ」について一つの動きに対応した「あ」と大きな声で発生し、動きと発生を同時に実施しながら、利用者全体の共鳴を引き出すとともに、「あいうえお」とそれぞれ身体部位を考慮したバランスのよい運動プログラムで連続性のあるプログラムとして実施した。

主運動時のテレビゲーム機を用いた運動とバーチャル体験の創出、評価については、高齢者運動プログラムにおいてゲーム機器を用いた運動プログラムの開発は、高齢者の運動可動域の制約を超えて、高揚感とともに体験として自己の拡大体験や、融解体験を引き起こしバーチャル空間における体験としての喜びと身体活動としての有効性を同時に引き出せる可能性を持つと思われる。実際に既存のゲーム機器を用いて体験型の「ボウリングゲーム」「太鼓ゲーム」を採用し、利用者の協力を得て実験を行った。ボウリングについては、実施に何本倒すことができたかということが可視化されるために大変興味深い様子であった。しかし、リモコン操作の困難さが示唆された。また太鼓については音と音楽を一致させてたたくという行為においてより、興味深い様子であった。運動量としても一定の運動量が確保されているものと推察された。

人材育成手法開発：申請当初、「福祉クリエイイト工房」in高島キャンパス、「福祉クリエイイト工房」シンポジウム開催の2つのプログラムを予定した。「福祉クリエイイト工房」in高島キャンパスは、2008年2月に次年度に繋げる予備的取り組みを実施した。「福祉クリエイイト工房」シンポジウム開催は、シンポジウムを一連の実践・セミナーの積み重ねの集約の場として位置づけるための検討を重ねてきた。その結果、一連の共同研究活動の総称を「福祉クリエイイト工房 in 新座」と呼ぶことにし、そのための企画を立てることに英知を結集してきた。次年度に向けた体制を構築することができ、申請当初の計画・目的を少なからず達成することができたと言える。

## &lt;優れた成果があがった点&gt;

- ・「家族介護」に対するコミュニティ心理学的アプローチについて開拓的取り組みができたものと考える。
- ・高齢者の運動プログラムにおいて運動と発声を併せたプログラム展開の可能性が示唆された。またゲーム機器を用いた運動において一定の運動量が確保できることのみならず、実施者の心理的な高揚感、体験としての拡大体験、融解体験が引き出される可能性が高いことが示唆された。この点はこれからの高齢者の運動プログラムの新しい視点として重要であること、また今後、運動機器の開発が促進される可能性を見出すことができた。
- ・人材育成部分については、今年度中に優れた成果をあげることはできなかったものの、「福祉クリエイイト工房」の帆本格実施にむけて共同研究活動体制が構築できた。

## &lt;問題点&gt;

申請当初、「福祉クリエイイト工房」in高島キャンパス、「福祉クリエイイト工房」シンポジウム開催の2つのプログラム：運動効果の測定及び評価について、新たに骨密度等の測定を実施するなど新たな指標づくりに取り組み始めたが、今後の継続的な評価をどのように実施するのか、新たな指標を生かしたチェックシートの作成等が今後の課題である。また、運動中の心拍数の測定を実施したが、高齢者の身体と動きに合わせた測定装置の工夫の必要性が示唆された。

準備運動（約20分間）における運動のバリエーションと発生を意識した運動プログラムの開発、実施、評価について：「あいうえお体操」を試作し、運度と発生の共鳴の有効性が示唆されたが、有効性の検証という点では、十分とはいえないため、この点が今後の課題として残った。またさらなる運動プログラムの開発が求められる。

主運動時のテレビゲーム機を用いた運動とバーチャル体験の創出、評価については、ゲーム機を用いた運動プログラムの実施による一定の効果が示唆されたが、その有効性の検証を今後進める必要があると同時に、ゲーム機器を用いた運動プログラムとしてどのような運動プログラムが高齢者に適合するのか、その方法と機器の工夫についてさらに検討していく必要がある。

「福祉クリエイイト工房」：「福祉クリエイイト工房」については、工房独自の視点で地域活性（再生）に貢献するコミュニティ福祉分野の実践人材の育成を検討する素地を作ることはできるものの、「介護予防」を地域全体で創造・維持発展させるための新たなコミュニティシステムの確立とどう運動させて整理させていくかが課題となっている。

## &lt;外部資金への応募状況・応募予定、および研究期間終了後(最終年度終了後)の展望&gt;

科学研究費補助金への応募、学外機関と共同・受託研究を実施した。研究期間終了後は、学部・研究科をあげて推進されるプロジェクトに本事業の研究成果を活用し、戦略的の大学連携事業等に積極的な応募する予定である。

<その他(本資金制度等について、ご意見・ご要望等がありましたらご記入下さい)>  
特になし

この(様式4)は、研究評価のために使用するものであり、公表はしません。